

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『百科全書』研究の現在：回顧と展望
Sub Title	L'Encyclopédie au présent : entre rétrospective et perspective
Author	鷲見, 洋一(Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.89, (2005. 12) ,p.269(48)- 288(29)
Abstract	
Notes	立仙順朗教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0288

『百科全書』研究の現在

— 回顧と展望 —

鷺見 洋一

Diderot、D'Alembert のフランス『百科全書』は、まともな研究をしようとする、さまざまな困難に逢着する。本論は、研究者が現在直面するその困難についての記述それ自体を目的とする。紙数の関係で、問題点をカテゴリー別に列挙するに留めよう。

I 原典資料

困難の第一は、『百科全書』のパリ版原書がなかなか入手しにくいという古書事情である。慶應義塾大学三田図書館収蔵の原書は、25 年ほど前の購入物件であるが、その頃から稀覯書としてすこぶる高価であった状況は今とまったく変わらない。

次に、たとえ原書を入手できたとしても、補巻や索引まで含めると、大型フォリオ版で 35 冊という規模の大きさがある。百科事典である以上、膨大な数の項目があり、多岐にわたる主題の広がりも目も眩むばかりである。事典は共同制作であるから、単一の作品と違って項目執筆者の同定が難しく、典拠となる資料が必ずしも調べ尽くせない。

それから、Diderot、D'Alembert によるパリ初版と呼ばれるものにも、実は初刷り以外にいくつかの刷りがあり、また少し遅れてスイスやイタリアで刊行されたパリ版そっくりの刊本もあるので、日本でも外国でも、初版と称する別物を所蔵している研究所や大学が少なくない。要するに、信頼

できる刊本がさらに希少なのである。現在流通しているリプリント版や電子テキスト版も、これまたまったく信用がおけず、手元に正真正銘の初版初刷りを備えていない研究者は、『百科全書』について実証的・書誌学的な研究を行うことを初めから禁じられているに等しい。

II 先行基礎研究³

『百科全書』の研究史を概括してみると、まずは Jacques Proust や John Lough に代表される、すでに古典と呼ばれるべき研究業績がある⁴。また、この両大家の成果以前に、基礎研究として注目される業績を挙げた若干の先達については、すでに逸見龍雄氏が詳説している⁵ので、ここでは触れない⁵。

上記二者にすぐ続く形で、Richard N.Schwab と Walter E.Rex らによる、『百科全書』研究史上初めての、パリ版初版本に関する詳細をきわめた書誌記述大成が刊行された⁶。現在なお、この7巻に及ぶ異本、異文との比較照合の浩瀚な成果を参着していない研究者は、目の前にある『百科全書』のオリジナル版本が、はたして信用のおけるものであるかがまったく判断できないことになっている。さらに、Frank A.Kafker による『百科全書』協力者に関する労作が日の目を見た⁷。『百科全書』項目執筆者138名を中心に調査を進めた成果である。

もっぱら主要業績に限定して紹介したが、以上は今後の『百科全書』研究者にとって、いわばフランス語初学者が手にする仏和辞典のような必携ツールであり、これへの参照なくして、パリ版の大事典をめぐり、なにがしかの解釈や見解を述べることはもはや許されない。

III 新しい展開

1) 百科全書の前と後 Frank A.Kafker 編纂による2冊の論文集(1981年と1994年)⁸によって、これまでもっぱら Diderot、D'Alembert 編集になるパリ版にだけ特権的な光が当てられてきた『百科全書』研究史に、新たな領野が拓けてきた。この事情について、逸見龍雄氏の的確な解説に耳を

傾けよう。「実際には十七世紀から続くより大きな知の地殻変動、知をめぐる文化的な転換（世界像の急激な拡大と産業革命という近代の知的空間に結節する時代の変容）のなかで形成された新たな百科全書思想／百科全書主義(encyclopédisme)の有機的でダイナミックなネットワークの網の目の中に置かれた文化的表象である […]」⁹。

こうした動向に呼応して、『百科全書』パリ版は、フランス人たちの手になる独自の偉業といった従来の特権的・孤立的視点から、ルネサンス以来、知の集成とデザインを繰り返すヨーロッパ規模の大きな潮流の中にあって、1750年あたりを軸として、「それ以前」と「それ以後」を結ぶ地点に位置づけられるようになった。

1：英国の事典　パリ版『百科全書』の直接のモデルとして、英国の Ephraim Chambers 『サイクロपीディア』 *Cyclopaedia* (初版 1728) がこれまでも増して脚光を浴びている¹⁰。また、あまり注目されていないが、その Chambers に先行する John Harris の『技術事典』 *Lexicon Technicum* (初版 1704、2版 1710)、Thomas Dyche の『英語新辞典』 *A new general English dictionary* (初版 1735)、フランスの Thomas Corneille 『技芸科学事典』 *Le Dictionnaire des arts et des sciences* (初版 1694) などが研究対象になるのは、もはや時間の問題であろう。

2：「トレヴー辞典」　Marie Leca-Tsiomis の博士論文¹¹は、上記 Chambers もさることながら、『百科全書』とほぼ同時代をカバーするイエズス会の「トレヴー辞典」諸版と『百科全書』とを比較照合するという地味な作業から、先人たちが予想もしえなかった、言語と哲学の新しい展望を切り拓いて見せ、誇張でなく、60年代の Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie* 以来の大傑作という評価を不動のものにしている。

3：「第一趣意書」の意義　周知のように、フランス『百科全書』は、英国の Chambers 『サイクロピーディア』の仏訳企画として出発した。

Diderot、D'Alembert が登場する以前の、出版業者 Le Breton を主役とする最初期の状況について貴重な情報を提供してくれるのが、1745年に配布された『第一趣意書』*Prospectus* である。英国事典の項目からの抄訳を含むこの「チラシ」が与えてくれるヒントは少なくない。稀覯資料であるので¹²、そもそも閲覧している研究者がほとんどいないが、今後、この趣意書の電子化が実現すれば、大きな展開が期待できよう¹³。

2) 汎ヨーロッパ規模の普及 商業出版物としての『百科全書』に着目した Robert Darnton の書物¹⁴ が指し示してくれた研究領域がある。対象となるのは国境を越えた彼方に広がるヨーロッパ諸国であり、出版業者もパリの Le Breton から、ヨーロッパ全土に股にかけて営業する Pankoucke のような、大規模経営の資本家が主役になる。諸外国の中心はスイスとイタリアであるが、そこで刊行された数種類の後続版に世界の熱い視線が集まり始めた。スイスのイヴェルドン版については、すでに強固な研究集団が形成されている¹⁵。一方、イタリアのルッカやリヴォルノで刊行された版は、イタリア本国でもあまり注目されておらず、今後に期待がかかる¹⁶。まずは、かつて Schwab、Rex、Lough、Kafker らがパリ版について行ったような徹底したインヴェントリ作業や執筆協力者調査を、後続版についても逐一試みなければならないだろう。

3) 地球規模の普及 『百科全書』を地球規模の国際的視野の中で捉え直した Annie Becq 主催による研究集会の記録は、今後ますます重要性を増してくると思われる¹⁷。この集会では、世界各地の百科事典について、専門家が集まってそれぞれ蘊蓄を傾ける、いわば「持ち寄り」スタイルが特徴であったが、それを一歩も二歩も進めて、単独研究者が、複数の文化圏にまたがって普及していく『百科全書』を追跡するという、斬新な比較研究の方法を確立し、かつ実践して見せたのが、Jacques Proust である。2005年9月19日に急逝したこの碩学は、現在考えられるもっとも進んだ『百科全書』問題を提起し、かつそれと真正面から取り組んだ¹⁸。

IV 電子テキストとその短所・長所

1990年代の18世紀フランス文学・思想に関わる出版状況の中で、私たちが遭遇したもっともラディカルな事件は、『百科全書』電子版の登場であった。シカゴ大学のARTFUL Projectがウェブ上に『百科全書』電子版を公開し（フランスでは2000年以来、ATILF研究所のサイトとしてアクセスできる）、それに相前後してフランスのRedon社がまずはCD-R版、ついでDVD版で、同じ『百科全書』を電子化したからである。前者ARTFUL版はもっぱら大学、研究所、図書館など組織を対象とした有料サイトであり、一般の個人がアクセスできない。一方、Redon版は普及版を標榜しているだけあって、日本の洋書店でも低価格で購入できてしまう強みがある。このディスクは、使えば使うほどにその便利さを痛感すると同時に、電子化された『百科全書』コーパスの限界や欠点も目についてきていることは否めない¹⁰。

1) 短所 電子テキストでは、非アルファベット文字（ギリシャ文字、日本語の仮名や漢字など）は排除され、図表や数字もほとんど無視される。活字の使い分け（『百科全書』ではスモール・キャピタルが決定的に重要な役割を演じている）もなされていない。脚注も考慮されず、項目文以外のテキストにも冷たい。とりわけ困るのは、本文の文字列が完全に一体化した連続の固まりとして収録されているので、ユーザーは項目名を打ち込んで、お目当ての文章に辿り着いても、それが『百科全書』のどの巻のどのページにあるのかも分からず、ましてや左右2段組のどちら側かということも、原書に当たらなければ見当もつかない。本文中に挿入された画像（有名なコシヤンの扉絵や、ところどころに散見される絵文字や飾りなど）は見あたらない。当然、本文第1巻巻頭を飾る「人間知識の体系詳述」も省略される。また、Redon版は、戦後めざましい発展・充実ぶりを示したProustやLoughたちの研究成果をまったく無視して作成されたため、項目執筆者の同定がでたらめで、信用できない、等々。

2) クロスレファレンスの重要性と発見

これだけの欠陥を背負い込みながら、この DVD がそれでも研究者にとって尽きない興味を掻き立ててくれるのが、「クロスレファレンス」の実現である。周知のように、初期の Diderot と D'Alembert は、アルファベット順に並べられた項目間に目に見えない連鎖の網を張るべく、「参照項目」という方法で、諸項目の結びつきを強化した。デジタル化され、ハイパーテキストとなった事典本文を織りなす言葉は、編集者たちの意図や願望を超えてまで、そうした観念の連鎖を可能にし、ユーザーの自由な検索を促してくれる²⁰。

V 新しい研究動向を踏まえた研究プロジェクト

『百科全書』の電子版が、クロスレファレンスの重要性を際立たせる役割を果たしたことが事実なら、「分類」、「連関」、「指示」、「照応」といったキーワードによって、『百科全書』以前の前近代から、知識の整理や集成を志す試みを一覽し、フランス『百科全書』を囲む時空の全容を描出する企画が立てられるべきなのは当然である。ここではそのほんの一端を略述する。

1) 分類総論

ある国民、一つの民族にとって、分類とは何を意味するか。分類するとは、人間精神が現実を把握し、それに秩序を与え、自らの知を組織立てるために必要な営みである。Michel Foucault が『言葉と物』第5章「分類する」全体を博物誌に当て、そこで18世紀に固有なタクシノミーへの偏愛を浮き彫りにして見せたのも、ヨーロッパ文化に根強い、この整序や統合への意志と執念を強調したいがために他ならなかった²¹。西洋のタクシノミー研究は、他文明圏に固有な分類システムとの徹底比較を介してなされる必要がある²²。

2) 記憶術と Bacon、『百科全書』²³

Frances Yates はその著作『記憶術』を 17 世紀で終わらせている。最終章「記憶術と科学的方法の成長」には、それでも私たちを 18 世紀へと誘うような記述がある。

「十七世紀において、予想されるごとく、記憶術は、依然としてルネサンスの伝統に従うロバート・フラッドのような著作家にとってばかりか、新しい方向に向かいつつあるフランシス・ベーコン、デカルト、ライブニッツといった思想家にとっても既知のものであり、論議の対象ともなっていた。これは奇妙だが重要な事実である。なぜなら、この十七世紀において、記憶術は今一度変貌をとげ、百科全書的知識を記憶することで世界を反映する方法から、新たな知識を発見する目的のもとで、その百科全書と世界そのものを調査するための一手段へと変わっていく。新しい世紀の流れの中で、記憶術が科学的方法の成長の一要素として、生存を続けていくさまを眺めるのは、楽しいことである²⁴」。

Yates は、どうやら 17 世紀の Bacon を介して、啓蒙時代の一大記憶装置であるフランスの『百科全書』に思いを馳せていることは間違いない。Bacon 哲学の中で、記憶に与えられた役割が決定的に重要であることは明らかである。自然科学の研究に記憶が用いられること、それも人工的な記憶の術、想起体系の秩序や配置の原理が、ある種の配列や分類システムへと変容することを Bacon は要求する²⁵。

ただし、知識を分類して系統化し、後の Chambers や Diderot たちに影響を与えたと言われる Bacon ではあるが、問題の著作『学問の進歩』(*Of the Advancement and Proficiency of Learning*, 1600 年)には、知識の分類図など影も形もない。ラテン語版刊行から 40 年弱前、Gilbert Wats による英語訳が出るに及んで、初めてツリー状に図示された分類図が登場した²⁶。Chambers や Diderot たちがこの英訳本の存在を知っていたかどうかは不明

だが、この翻訳書に初めて図形として体系的に示された Bacon の分類思想が、後世の展開にとって出発点となったことは間違いない²⁷。

周知のように、『百科全書』の編集者 Diderot は、事典編纂に関する多くの思想を英国の Bacon に負っている。本文第一巻刊行前に配布された『第二趣意書』には、「人間知識の体系詳述」の解説文が付いているが、これは D'Alembert が第一巻巻頭の「序論」で引用している Diderot の文章とほぼ同文であり、記憶術の利用法について、Diderot が英国哲学者からどれほど影響を受けているかがあきらかになる。Diderot にとって、記憶術は、百科全書的知の構築に役立つような目標をはっきり定めて使うべき手段なのである。そもそも「人間知識の体系図」自体が Bacon のいうところの自然を解読するための「事例表」そのものであるし、また 11 巻におよぶ図版集は、あきらかに、記憶術における「知的な想念を、感覚的な映像に変えてしまう」イメージの効果を狙って編集されていると思われる。「前近代」の自足的・内閉的知のシステムと、『百科全書』が体现する、外部世界に開かれ、流動する知の構図とを結ぶ、わずかな架け橋が、この記憶術の痕跡に認められはしないか。

3) パリ版『百科全書』の先行類書における分類指示

『百科全書』の全項目は、見出し語の次に「分類指示」が付され、本文第 1 巻巻頭を飾る「人間知識の体系詳述」に関係づけられていることが知られる。Diderot たち編集スタッフ自身が構想するクロスレファレンス・システムは、この「分類指示」と、それから項目本文の随所に挿入される「参照指示」とを手がかりに調べることができるはずだ。以下、『百科全書』以前の先行類書の中で、とりわけ「分類指示」がどう扱われているかを検討しよう。

1: ハリス John Harris は、ロンドンで *Lexicon Technicum* を刊行し、数学と物理学に関わる当時の知識を網羅的に提示した。初版は 8200 の項目を数える。この書物には、当時の辞典の通例として、ページ付けがない。序

文で、Harris は自分の著作がたんなる言葉の辞書ではなく、事物の事典であることを強調している。第2巻は1710年に出たが、両巻のアルファベット順索引を添付し、24種の主題を掲げて、その内部では各見出し語がアルファベット順に並ぶようになっている²⁸。ただし、Baconを知るものにとって、Harrisによる科学の分類は何ら目新しいものではない。それに、*Lexicon Technicum*には、参照指示も分類指示もないのである。

2：ダイチ Thomas Dyche の『英語新辞典』*A new general English dictionary* (初版1735年)は、一見、アルファベット順に配列されたただの英語辞典であり、基本的には現代仕様の英英辞典と選ぶところがない。HarrisやChambersと比べて小型でハンディであるため、よく売れたようである。Diderotが1750年に発行した『百科全書』の*Prospectus*『趣意書』で名前を挙げたため有名になったが、Dycheと『百科全書』との関わりについてこれといった研究がなされた形跡はない。現在のところ、全ページを通読したLael Ely Bradshawによる要領のいい紹介記述があるのみである²⁹。ページ付けはないが、初版で870p、第2版(1740年)で911pを数える。各見出し語の後に品詞がイニシアルで示される。名詞(S.)、形容詞(A.)、動詞(V.)など。それ以外に珍しいところでは、引用の出典が、きわめて恣意的に書名や作者名で、時たま示される程度である。Dycheにはクロスレファレンスの発想が一切なく、参照指示も分類指示も見あたらない。

3：チェンバーズ³⁰ 『サイクロピーディア』は、知識というものを構造化された全体と見なした。Chambersは彼なりに「知識の系統樹」や「分類記号」を考えていたし、参照システムにこだわっていた。「序文」にはこういう文章がある。

「私たちの狙いは、さまざまな素材を単独で孤立した、あるがままのものとしてばかりか、相関的に、それぞれ相互の関係において考える

ことであった。題材は多くの全体として、またより大きな全体に属する多くの一部として扱われる。個々と全体との関係は参照指示によって示される。その結果、一連の参照によって、一般から個へ、前提から結論へ、原因から結果へ、あるいはその逆さまに、すなわち、もともと複雑なものからもっとも単純なものへ、あるいはその逆に行くことができるようになる。著作のさまざまな部分の間に連絡が成り立ち、諸種の項目は、ある意味で、アルファベット順によって遠ざけられていた学問の自然な配列に、位置づけ直されるのである³¹⁾。

Chambers における参照への執念は、『サイクロピーディア』の初版から2版への経過を追っていても認められる。たとえば、項目「Blood」だが、初版から4つの参照指示を残し、12を加え、たった3つを削除しているのである。

「分類指示」はどうか。一見、各項目冒頭に、それらしきものは見あたらない。ただ、『サイクロピーディア』には、「分類指示の前身モデル」とでも呼びたいような表現がところどころあり、項目を一段階上の分類カテゴリーに結びつける働きを示していることは事実である。そして、同じ現象は、実はすでに Harris の『技術事典』にも認められることを付言したい。

3) 第一趣意書 (1745 年) 研究

いうまでもなく、この資料はフランス『百科全書』編集最初期についての貴重な証言である。『百科全書』が英国の『サイクロピーディア』翻訳企画として出発した以上、これまで研究者の間でまったく等閑に付されてきた初期事情が、さまざまな角度から解明される必要がある。以下にその若干を記す。

慶應義塾大学三田メディア・センターは、1996年に『第一趣意書』のオリジナルを購入した。原本にサンプルとして掲載されている4つの項目の見出し語は、フランス語で以下のように訳されている。「Atmosphère」

(大気)、「Fable」(物語)、「Sang」(血液)、「Teinture」(染料)。英語原文では、それぞれ「Atmosphere」、「Fable」、「Blood」、「Dying」である。イニシヤルだけを取り出してアルファベット順に並べれば、ABDF となり、これらの項目が Chambers の 2 巻本の第 1 巻のみから選ばれていることは明らかである。

1: 『サイクロピーディア』仏訳の底本問題 まず、『サイクロピーディア』諸版本の調査が大前提になろう。『百科全書』の『第一趣意書』が配布された 1745 年前までに刊行されている『サイクロピーディア』の版本は、現在分かっている限りで 7 種類あり、1: 1728 [1727] (London), 2: 1738 (London), 3: 1738 [1739] (London), 4: 1740 (Dublin), 5: 1741 (London), 6: 1741-1743 (London), 7: 1742 (Dublin) となっている。確かなことは、Diderot たちが『サイクロピーディア』仏訳の底本にしたのは、初版本ではありえず、1738 年の第 2 版以後であるということである。何故なら、初版本には『百科全書』趣意書に訳出されている 4 つの項目のうち、「Dying」が含まれていないからである。

筆者の調査では、『サイクロピーディア』の 1741-1743 年ロンドン版と、次の 1742 年ダブリン版とが、フランス版『百科全書』のモデルとなった可能性が高いように思われる。両者は 21 箇所の変異以外はまったく同文であり、また、活字の組みも若干の変更を除いて同一である。どちらがフランス『百科全書』のモデルとなったテキストであるかは、現在のところ、決定できない³²。

さらに困るのは、出版業者 Le Breton の肝いりで組織された、『百科全書』刊行組合の会計係 Briasson が付けていた詳細な出納簿に、Chambers の補遺購入が記されていることである。Louis-Philippe May が刊行したテキストによると、記載は 1753 年になっている³³。たしかに、この年、ロンドンでは *A supplement to mr Chambers's Cyclopaedia* と題する補遺版が刊行されており、どのような使途を考えてかは不明だが、フランス人編集者がこれを購入したことは間違いない。後続の増補改訂版にせよ補遺にせよ、

Chambers の事典が、1728 年の初版以外に数多くの版本で頒布されてきたことは明らかであり、今後私たちは『サイクロピーディア』という書物を、単体としてではなく、むしろその複数性において捉えなければならないのである。

2：『サイクロピーディア』イタリア語訳の存在 Chambers の事典を翻訳したのは、Diderot たちフランス人だけではない。実は『第一趣意書』が刊行された 1745 年直後に、イタリア語訳が、それも数種類、日の目を見たのである³⁴。Diderot たちパリ版の編集者は、この翻訳の存在を知っていたらしい。Diderot 自身が『第二趣意書』で書きつけた「Chambers の全訳が我々の眼前を通り過ぎた³⁵」という意味不明の文言は、自分たちフランス人スタッフによる翻訳を指すともとれるし、Charles Dédeyan のように、イタリア語訳の可能性を考えることもあながち無理ではなかろう³⁶。もっと重要な手がかりは、前述のメイによる出版業者 Briasson の出納簿に、1750 年 1 月にイタリア語版を購入したという記載が認められることである³⁷。3 巻とあるが、現在の調査では、3 巻本のイタリア語訳は存在しないので、部分購入ということも考えられよう。いずれにしても、イタリアのどこの版本かはまったく不明である。また、購入は確実であるとしても、Diderot たちがイタリア語訳に目を通して、どこまでパリ版『百科全書』の制作に反映させたかという、一番肝心な問題は解決されたことにならない。Calogero Farinella が執筆した、イタリアにおける Chambers の翻訳状況に関する浩瀚な論考では³⁸、ナポリとヴェネツィアで出た翻訳本と、さらに 1753 年にロンドンで刊行された Chambers の『補遺』とが、イタリアにおける政治状況や社会風潮を背景に詳細に論じられ、どうやらこの方面では、フランスはイタリアに遅れをとっているという印象が強い。

3：仏訳者の同定と契約破棄の問題 『第一趣意書』に部分訳載された『サイクロピーディア』の序文や 4 つの項目は、一体誰が翻訳したのだろうか。逸見龍雄氏がパリ国立古文書館で書写した資料が、その問題の決め

手になるだろう³⁹。出版業者 Le Breton が、Chambers 出版企画を持ち込んだ英国人 Mills と争った裁判のために起草した覚書である。逸見氏の許可を得た上で、本論に関わる部分をあらまし紹介する。Le Breton によると、Mills がどうやら *Journal de Trévoux* に書かせたとおぼしき賞賛文⁴⁰とは違い、『第一趣意書』の翻訳者はドイツ人の Sellius だった。ただ、Sellius の訳文があまりにも拙劣だったので、Mills がこれに手を入れ、Le Breton の知人のフランス人が、フランス語の文体について協力した。趣意書の評判は上々だったので、いよいよ英国辞書本体の翻訳チームが形成され、初稿に対して 1745 年 7 月 1 日に 120 リーヴルが支払われた。その後の翻訳作業の進捗は、複数の翻訳者が作成した訳稿を、Le Breton がまとめて Mills に渡し、Mills は閲読して手を入れ、返却する。Le Breton は原稿を「フランス語の表現に関して、仲間にしていたある聡明な人物に読ませたのだった。この人物がいなければ、趣意書もあれほどの評判を博することはなかっただろう」。ところが、Mills が訳稿に実際目を通していただろうかは怪しい。彼は預かった原稿を返却しようとはしなかった。さらに Mills が英国から取り寄せると約束していた『サイクロピーディア』2 巻本もついに届かず、Le Breton はパリで借り受けるしかなかった、云々。本稿は Le Breton と Mills の係争それ自体を対象としないので、記述を打ち切るが、編集初期の翻訳者をめぐる状況は、以上の覚書に尽くされていると思われる。

4：仏訳文の検討 少なくとも、『第一趣意書』に印刷されている限りの仏訳文は、たとえ Le Breton が述べるように、Sellius や Mills のような外国人に加えて、信用できるフランス人の手が入っているにせよ、あらゆる意味で原文に忠実な、いわゆる「直訳」のスタイルが大きな特徴である。『サイクロピーディア』の英語文と比較してみると、単語レベルはおろか、構文に至るまで、原文の姿形は温存され、18 世紀における自由な翻訳スタイルとは大きな隔たりが感じられる⁴¹。だが、この手がかりだけで、『サイクロピーディア』と『百科全書』全体との相互の関係にまで論を進

めるには、いささか資料不足であろう。これも今後の無視できない研究課題である。

5：最初期の意図復原 『第一趣意書』の原本は、フォリオ版でタテ 385 mm ×ヨコ 235 mm の紙 6 枚、12 ページの冊子である。タイトル・ページには、これが英国の Chambers『サイクロピーディア』からの翻訳であることが明記されている。銅版画付き、予約制で、版元は Le Breton、1745 年となっている。3 ページから 8 ページまでがいわゆる趣意文であり、そこでは英国の先達の偉業とその内容が事細かに紹介される。Chambers の事典がたんなる辞書ではなく、科学分野における成果報告書であることも強調されている。4 ページから 5 ページにかけて、英国事典序文からの長大な引用があり、それを受けて『サイクロピーディア』の全項目がある種の系統図に従って配分・配置されており、項目間は参照システムによって結ばれあっていることが指摘される。その一例として、趣意書末尾に訳出される項目 «Atmosphère» をめぐる諸概念のネットワークが紹介される。

6 ページには原書にある知識の分類図の仏訳が印刷されている。分類図は左から右へと枝葉を広げ、右の末端で計 47 の主要項目に分かれる。脚注では、その内から 7 項目 (Théologie、Physique、Médecine、Chimie、Astronomie、Architecture、Poésie) が選ばれ、それぞれの下位区分や類縁観念が列挙される。この部分は、初期編集者の頭の中に、1750 年代を待つまでもなく、すでに壮大な知の分類思想を英国の先達に学ぶという積極的な意図があったことを証し立てている。

趣意文最後の 8 ページでは、著者は図版の問題に触れ、Chambers では本文中に挿入されていた図版を別巻にまとめることで、本文の項目から項目への参照行為を強いられる読み手の便宜を図った旨述べている。同ページの下半分では、予約購読者のための条件が提示され、さらに予約を受け付けるヨーロッパ 64 都市の書籍商がアルファベット順に紹介されている。残り 4 ページは、先にも述べた試訳見本が 4 項目にわたって引用さ

れている。

この『第一趣意書』の構成だけから、初期編集者の意図や狙いを抽出する作業は必須であろう。たとえば、8 ページ目の書籍商リストだけでも、当時のパリとヨーロッパとを繋ぐ販売ネットワークを浮かび上がらせる格好のデータになるはずである。

4) 4 項目の来歴と変遷

『第一趣意書』の後に、1751 年以降、順次刊行される『百科全書』の本巻がくる。趣意書で抄訳された4 項目は、その後、パリ版を初めとする初版でどういう扱いを受けるのか。ここでは、内容に立ち入らず、飽くまで「分類指示」という観点から、それらの来歴を辿ってみる。「分類指示」すなわち *désignant* は、各項目見出し語に続いて、当該主題がいかなる上位分類カテゴリーに属するかを示す役割を担い、第1 巻冒頭の「人間知識の体系詳述」に含まれる分類単位が、場合によっては階層順に並べられる。

1：パリ版 Diderot、D'Alembert による『百科全書』パリ版から、各項目冒頭の「分類指示」は、きわめて重要な役割を演じ始める。4 項目中、3 つまでが「分類指示」を掲げている。項目 «*Atmosphère*» は *Physique*、項目 «*Fable*» は *Mythologie*、*Apologue* (*Belles-Lettres*) そして *Belles-Lettres*、項目 «*Sang*» は *Anatomie* と *Physiologie* に送っている。「分類指示」を持たないのは項目 «*Teinture*» だけである。今後の研究では、この指示に、さらに項目中の参照指示 *Renvoi* と、分かる限りの典拠資料指示とを加えて、ある種の「開かれたテキスト」としての事典について、可能な限りのネットワーク復元を試みなければならないだろう。

2：イヴェルドン版 4 項目中、3 つまでがパリ版と同一である。項目 «*Sang*» だけが R の記号で示されるように、全面的に書き換えられ、著者の署名略号が <H.D.G.> であることからして、Albrecht von Haller によることが推定できる。

3：イタリア版 本文に関しては、パリ版そのままのコピーであることを標榜する以上、Lucca 版も Livorno 版も新味はない。イタリア版の特色は、むしろパリ版の記事に編者がフランス語で付けた膨大な脚注であるが、問題の4項目については、残念ながら何の注も見あたらない。

以上、『百科全書』研究の来歴を踏まえた若干の展望を略述したが、この広大な領野を踏破する方法は一つしかない。それは、デイドロたちがそうであったような、ある種、志を一つにする仲間たちによる共同研究である。

注

- 1 本文は総ページ数 16142p.、71709 項目、図版は 2885 枚である。
- 2 『百科全書』研究に欠かせない典拠調査については、小関武史氏に以下の論考がある。『『百科全書』研究にとっての典拠調査の意義』、『一橋論叢』第 123 巻第 4 号、2000 年 4 月号、pp. 704-718。
- 3 この問題に関しては、逸見龍雄氏の以下の論文が詳しい。これまで日本で書かれたもっとも優れた整理と問題提起である。『『百科全書』を読む—本文研究の概観と展望—』、『慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC 機構）2004 年度研究報告書』、2005 年 5 月 10 日発行、pp.7-32。
- 4 ジャック・プルースト（モンペリエ大学、Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Albin Michel, 1995 [1962]）やジョン・ラフ（ダーラム大学、John Lough, *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert*, London, Oxford University Press, 1968; John Lough, *The Encyclopédie*, Slatkine Reprints, 1989 [Longman Group Ltd, 1971]）などの古典的研究がある。
- 5 逸見氏の前掲論文、pp. 10-13。
- 6 *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 80、83、85、91、92、93（以上『百科全書』本文）、223（同図版）。
- 7 *The Encyclopedists as individuals : a biographical dictionary of the authors of the Encyclopédie* (*Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 257), Voltaire Foundation, Oxford, 1988; *The Encyclopedists as a group : a collective biography of the authors of the Encyclopédie* (*Studies on Voltaire and the*

- Eighteenth Century*, 345), Voltaire Foundation, Oxford, 1996.
- 8 *Notable Encyclopedias of the Seventeenth and Eighteenth Centuries: Nine Predecessors of the Encyclopédie (Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, 194)*, Voltaire Foundation, Oxford, 1981.
- *Notable Encyclopaedias of the late Eighteenth Century: eleven successors of the Encyclopédie (Studies on Voltaire and the eighteenth century, 315)*, Voltaire Foundation, Oxford, 1994.
- 9 逸見龍雄、前掲論文、p. 25 右。
- 10 Diderot 以前の『百科全書』企画に携わったフランス人が、仏訳底本としたのは、『サイクロピーディア』初版 (1728) ではなかった。この問題は現在なお未決である。なお、国際 Diderot 学会誌最新号に、『サイクロピーディア』序文が、Michel Malherbe の手で全文仏訳されたのは記憶に新しいところである。 *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, numéro 37, octobre 2004。
- 11 Marie Leca-Tsiomis, *Ecrire l'Encyclopédie. Diderot: de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, (*Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 375), Oxford, Voltaire Foundation, 1999.
- 12 現在はアメリカのヴァージニア大学と慶應義塾大学だけが所蔵している。
- 13 『第一趣意書』に関する現在までのまとまった論考は、以下の拙論である。Yoichi Sumi, «<Atmosphere> et <Atmosphère>. Essai sur la Cyclopaedia et le premier Prospectus de l'Encyclopédie», in *Vérité et littérature au XVIIIe siècle. Mélanges rassemblés en l'honneur de Raymond Trousson*, édité par Paul Aron, et al., Paris, Honoré Champion, 2001, pp. 271-284.
- 14 Robert Darnton, *L'Aventure de l'Encyclopédie, 1775-1800*, préface d'Emmanuel Le Roy Ladurie, traduit de l'américain par Marie-Alyx Revellat, Librairie Académique Perrin, 1982.
- 15 最新の研究成果を以下に挙げる。 *L'Encyclopédie d'Yverdon et sa résonance européenne, contextes — contenus — continuités*. Recueil de travaux édité par Jean-Daniel Candaux, Alain Cernuschi, Clorinda Donato, Jens Häslér. Slatkine, Genève, 2005.
- 16 イタリア版『百科全書』については、まず以下の先駆的研究がある。Ettore Levi-Malvino, «Les éditions toscanes de l'Encyclopédie», *Revue de littérature comparée*, no. 3, 1923, pp. 213-256. George B. Watts, «The Swiss Editions of the Encyclopédie», *Harvard Library Bulletin*, IX, no. 2, 1955, pp. 213-235. また、イタリアでその後刊行された論文集も重要である。

- Guido Abbattista (a cura di), *L'enciclopedismo in Italia nel XVIII secolo, Studi Settecenteschi*, 16, Bibliopolis, 1996.
- 17 Annie Becq (sous la direction de), *L'Encyclopédisme*, Actes du Colloque de Caen 12-16 janvier 1987, Klincksieck, 1991.
- 18 プルースト晩年の業績については、ここで詳述する余裕がないが、注 15 に紹介した論文集に掲載された論考が、はからずもフランス、スイス、オランダ、日本を視野に納めた壮大な成果であるので紹介する。《Sur la route des Encyclopédies : Paris, Yverdon, Leeuwarden, Edo》, in *L'Encyclopédie d'Yverdon...*, pp. 443-468.
- 19 以上 2 種類の『百科全書』の電子テキストについては、2000 年 11 月 17 日、18 日の両日、パリ第 7 大学で開催された国際研究集会が、真正面からこれらを取り上げ、詳細に論じている。その全容は以下の雑誌特集号に掲載された。*Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n°s 31-32, avril 2002. *L'Encyclopédie en ses nouveaux atours électroniques : vices et vertus du virtuel*. Actes du colloque des 17 et 18 novembre 2000 organisé par la Société Diderot à l'Université Paris 7-Denis Diderot.
- 20 上記特集号には、電子版『百科全書』を使って、これまで手仕事ではとうてい叶わなかったクロスレファレンス検索を試みた成果が、いくつか紹介されている。『百科全書』全体の参照項目それぞれ自体を研究対象にして、その隠れた構造や傾向を明るみに出すことに成功した Giles Blanchard と Mark Olsen (pp. 45-71)、および Véronique Le Ru (pp. 169-176)、『百科全書』刊行直後、その全巻を読破し、Diderot ですらもが実現できなかった「索引」(それなりの「クロスレファレンス・システム」)を完成させた Mouchon について、初めて光を当てた Pierre Crépel (pp.201-224)。さらに、特定の主題に特化して、対応する項目の紡ぎ出すクロスレファレンスを丁寧に追いかけた小論文もある。〈 Femmes 〉 (pp.71-90)、〈 Population 〉 (pp.103-122)、〈 Oeconomie / Economie 〉 (pp.123-137)、〈 Montesquieu 〉 (pp.178-188)、〈 Charles Bonnet 〉 (pp.234-250)、など。また、寺田元一氏の力作(『編集知』の世紀 — 一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』、日本評論社、2003 年)においても、クロスレファレンスは重要視されている。とりわけ、第 10 章『「百科全書」の〈人間〉ネットワーク』で、寺田氏はルドン社版の電子テキストを使ったクロスレファレンス構築の実際例を報告する。事典内に張り巡らされた「人間」のネットワークと、「女性」のそれとを検証するのである。その結果、『百科全書』刊行の前半では、Diderot が敢行する「間テキスト性」の徹底が特徴であるのに対し、項目執筆の責任が

- ジョケールに任せられた後半部分では、前半部分の参照行為にまったく応えようとしなない「知の単一性」が前面に出てくるという傾向が炙り出される。
- 21 Michel Foucault, *Les Mots et les choses*, Gallimard, 1966, pp. 137-176.
- 22 その萌芽はすでにアニー・ベック主催の国際研究集会論文集の中にある。Annie Becq (sous la direction de), *L'Encyclopédisme...*
- 23 記憶術と『百科全書』との関係については、以下の拙論を参照のこと。「Essai sur l'excédent — Comment revaloriser l'Encyclopédie?», in *Thématique et rêve d'un éternel globe-trotter*. Mélanges offerts à Shin-ichi Ichikawa. Textes recueillis et publiés par Shiro Fujii, Yoichi Sumi, Sakae Tada. Le Comité Coordinateur des Mélanges Shin-ichi Ichikawa, Tokyo, 2003, pp. 27-37.
- 24 イエイツ、『記憶術』（玉泉八州男監訳）、水声社、1993年、pp. 415-416。
- 25 『素描』において、— 後には『新オルガノン』において— 素描された『記憶への補助』の理論は、論証の発見を支配する諸規則と、論証を想起したり配列する技術を構成する規則を、異なった分野へ適応させることによって帰結したものなのである」（パオロ・ロッシ『魔術から科学へ』前田達郎訳、みすず書房、1999年、p. 256）。
- 26 *Of the advancement and proficiencie of learning : or, The Partitions of sciences, nine books*. Written in Latin by the most eminent, illustrious and famous Lord Francis Bacon, baron of Verulam, viscount St. Alban, counselour of estate and lord chancellor of England. Interpreted by Gilbert Wats, London : T. Williams, 1674.
- 27 Walter Tega, «Encyclopédie et unité du savoir de Bacon à Leibniz», in Annie Becq (sous la direction de), *L'Encyclopédisme...*, pp. 69-96.
- 28 以下にリストを英語のままに引く。1) Navigation and Sea-Terms ; 2) Mathematical and Philosophical Instruments, and Practical Mathematicks ; 3) Natural Philosophy and Physicks ; 4) Geography and Chronology ; 5) Chymistry ; 6) Heraldry ; 7) Architecture ; 8) History, Ancient Customs, etc. ; 9) Anatomy ; 10) Painting and Sculpture ; 11) Agriculture and Hortulane Terms ; 12) Opticks and Perspective ; 13) Botany, Natural History, and Meteorology, etc. ; 14) LAW, Common, Civil and Canon ; 15) Grammar, Rhetoric, Poetry, etc. ; 16) Mechanicks, Staticks, etc. ; 17) CONICKS ; 18) DIALLING ; 19) Chyrurgery, Pharmacy and Names of Diseases ; 20) MUSICK ; 21) GEOMETRY ; 22) Fortification, Gunnery, and Art Military ; 23) Logick, Metaphysicks and Ethicks ; 24) Astronomy, and Doctrine of the

- Sphere.
- 29 «Thomas Dyche's *New general English dictionary*», in Kafker, Frank A., ed., *Notable Encyclopedias of the Seventeenth and Eighteenth Centuries: Nine Predecessors of the Encyclopédie*, (*Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 194), Oxford, 1981, pp. 141-159.
- 30 Stephen Werner, «La modernité de Chambers», in Annie Becq (sous la direction de), *L'Encyclopédisme...*, 161-167.
- 31 Ephraim Chambers, *Cyclopaedia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*, London, 1728, vol.I, p. i.
- 32 Voir Yoichi Sumi, «<Atmosphere> et <Atmosphère>...».
- 33 «Le *nouveau Supplément* du Chambers, tiré de Londres remis à M. David... 150 [livres]» (Louis-Philippe May, «Histoire et sources de l'*Encyclopédie* d'après le registre des délibérations et de comptes des éditeurs et un mémoire inédit», *Revue de synthèse*, février 1938, no.XV, p. 65).
- 34 ナポリ (1747-1754)、ヴェネツィア (1748-1749)、ヴェネツィア (1762-1765)、ジェノヴァ (1770-1775)。
- 35 *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers...*(Prospectus de 1751), p. 2-a.
- 36 «[...] cette phrase est énigmatique: Diderot a-t-il outre le texte anglais une traduction manuscrite de l'abbé de Gua en français, ou fait-il allusion à la traduction italienne du Chambers? » (Charles Dédeyan, *Diderot et la pensée anglaise*, Firenze, Leo's Olschki Editore, 1987, p. 51).
- 37 «Fourni le *Chambers* italien, tomes 1, 2, 3 br... 36 [livres] 15 [centimes] » (Louis-Philippe May, *art. déjà cité*, p. 54).
- 38 «Le tradizioni italiane della Cyclopaedia di Ephraim Chambers» in Guido Abbattista (a cura di), *L'enciclopedismo in Italia nel XVIII secolo, Studi Settecenteschi*, 16, Bibliopolis, 1996, pp. 97-160.
- 39 André-François Le Breton, *Mémoire pour André-François Lebreton contre le Sieur Jean Mills, gentilhomme anglais*, in-4 ed, 1745. [AN AD/VIII/8]
- 40 『第一趣意書』の書評である。ここでは執筆者は、後年の攻撃的な態度と逆さまに、英国人 Mills の才能と篤志を称えている。 *Journal de Trévoux*, mai 1745, pp.934-939.
- 41 この問題の詳細については、前掲の拙論を参照のこと。Yoichi Sumi, «<Atmosphere> et <Atmosphère>...».